



天竺山子物

天竺山子物

天竺山子物



東都蕉門

咫尺齋豐山著



晋百子一詩錄

天保辛卯

大晉新刻



蕉竹居藏

序ノ一

晋子の事臨しりる痛快の境
ちねいさる人ましく人し
一大快事とかとて心はさう同
僚咫尺主人よく其能逸事
知集め移居江遊まき人口下
膾炙せしむるを女子編入す



吟 三 花 の 餘 情 也
 と 花 を 愛 天 齋 花 士 大
 一 花 凡 花 士 一 花 士 左 袒
 在 一 花 書 刻 一 花 一 花 僚
 窗 一 夕 花 子 花 一 花 一 花 端
 緒 甚 一 花 一 花 一 花 一 花 一 花

序ノ三

文政庚寅年九月一日
 日 榎 增 長 子 長 子 一 花
 一 花 一 花 一 花 一 花 一 花

寛文元午
...

寛文丑 一
...

七月十七日 母霊夢

人目おハるる
...

七夜 曉

住吉の松を
...

寛文九 酉 九月廿二日

東院靈夢

云のち強きものも門にも極至く
いふ事や〜るハたちつ〜る形

大圓寺

十歳入學

本草細目写

十四歳 於堀江所

治 主治 發明

十五歳 内經素本 易經素本写

蒲生五郎公宗 需之 伊勢物沢善之

右表帛出来本 多下野守殿、秘之

右〜襪義〜〜刀 戸徳以

十六歳 草刈三越講延

服部平助講延

田覺寺 太巖和尚 詩學 易傳受

十七 桃青廿歌仙

十八 延室午 發句合 抄風五十句合作

秋洪水

廿 延室申 次韻 信國七百五十句ニ對ス

辛酉

壬戌 冬 朝辭來聘

天和 亥 續之のり 原 於芝金地院前

貞享 甲子 於京 蠹集

丙寅 新山家 本家の記

丁卯 續之のり 接之

四月 八日 妙務尼卒 五十七歳

元禄 乙未 上京 孝少亭講歌書

十一月 廿二日 宗隆尼卒 於望田 葬八十四

元禄三庚午花つみ二卷一夏百句一撰之

四 未 辛

雜談集 二卷 撰之

五 申 壬

六 酉 癸 八月廿九乃東吹雪 萩の春撰之

行年七十二歳

七 甲 戌 旬兄弟 三卷 撰之 上京

十月十二日 芭蕉卒 至二折尾枕撰之

栗津義仲の葬之

九 丙 子

庭竈牛也 雜着をすりりり

十 丁 丑 くのりそ二巻 撰之

十一 戊 寅 十二月

寛文

延宝九

天和四

貞享五

虚栗

蠹集

續みぢ栗

新山家

花摘

上下 非人八分

雑談集

句兄丈

上中下

枯尾華

わりら台

未の栗

上下

三上吟跋の夏

元禄十三
 三上吟
 元禄十
 焦尾琴
 十月
 六月

晋翁著述目錄

田舎の句合	誰々集	枯尾花
虚栗	以津字著	若葉合
蟲集	花摘集	末葉集
新山家	錦繡緞	三上吟
續虚栗	雜詩集	焦尾琴
秋の露	句兄弟	類柑子

咫尺齋豊山書

秋のそ

尾上の

松を

まのき

う

日 隆平年



晋子一傳録



五世

咫尺齋豊山著

援亦其角、宝晋と云又晋子と号す、本姓竹下氏なり、核本の
母方の姓也、父竹下東順号晋子、元和ハ壬戌江別堅田系
おぬ、産す本多下野のふところ、傳録を得て、医を業とし、
後官を辞し、東武より、和歌連歌依格を嗜む、由良
正春の門人也

類柑子

由良、師たる門正春と云、人歌連歌不取、と云々

や生涯の癖を〜身よきも病を〜病よき世の人海を〜
ま〜〜〜〜〜亡父を懐懐〜〜〜〜〜
年中九千の加を〜〜〜〜〜

花摘集

正春日詩世の夕をむきし

あぢあぢや〜昨日の夕の風 正春

日記

五十七あ〜〜〜

妙務尼とあ〜〜其角の母〜貞享四年丁卯四月八日

續虚栗

四月八日母の身より〜

身より〜〜〜

其角

昔の〜七の〜

二

身より〜母を〜

五七の口追はる

身の母は母を〜

芭蕉翁

香清の〜

其角

色〜乃〜

嵐雪

各俔

卯戌年目の膝取ぬ日替〜
好の歌を〜
有〜
物あ〜
啼〜

高浪
松風
浜徳
擧白
嵐雪

〔五元集〕と天下の五元を土と云ふは

この強よりして土車の強曲より
はちのくまのわらわらとあり

晋朝の句の多くは強曲よりあり

日記五元集の句あり堀

江町平に於ておききしりて匡を草刈に裁きしりて送る

の名を星月夜、傾板と云く強曲を延室のくま板より

門よりあり五元集、是十四五の頃、桃青廿次仙、延室五丁己、芭蕉翁撰

螺舎と云り、晋子十七也、是初名也、一螺たうの強よりあり、田舎

句合、延室、庚申晋子吟、芭蕉翁判詞、の序より螺子と云り、はちの原、貞享四年

小麒麟角と云く、是も貞享の江戸麻子の録の江戸圖鑑、亦も龜鶴と

あやと云り、晋其角と云く、易経、晋の卦乃象辭、

晋其角と云く、とある、と云く、宝晋高、平之章、

一鶴と云く、文字、其想を以て、佐玄龍、文山の只く佐、亦氏号、煥甫又池養、享保、年

二月廿一日没増上寺中平、通額を以て、尊ぶ、け宝晋と云

浄運院、葬、と云く、五元集、是より儒を寛翁と云く、生ぶ、

寛齋先生服部氏名保庸俗称平助後藤九郎、享保、

六年六月三日没、日向菘、何谷徳雲寺、葬、

此名を以て詩を、太頼、私為、おき、

正月三日化、事、新山家、詳、之、画、を、英、一、様、おき、

寿、五十七、英、一、蝶、名、信、香、又、安、雄、幼、名、猪、三、郎、後、次、右、五、門、能、名、曉、雲、享、保、九、年、

和漢文操、雷柱子と云く、新山家、

皮篋摺、有竹居と云く、雑詩集、狂而坐と云く、六藏茶

善哉茶、文会庵等の法号あり、末若葉類相子、

と云く、深川の号あり、愚案、と云く、縁の末、

の法号あり、禮の後、と云く、ね、

類柑子小晋子の名の新種をさけるよき比の判母あり
 汝川と志すすをとおひあはさるよけり川とよあり早
 竟廣漢野乃牛ををりし廊菴の月報を中めり母
 孫ありしとてとて汝汝り無河有の裾とる好様わら
 川又同集小右此の句ふ「極打や山吹きくくわり川」
 と便小晋子を悼し「句あり堀江町を將奔きく延宝
 の末ありふ日記小天和三年芝金地院ふ小拾虚栗
 を其まきよしとて奇跡考小此日記をくめ二葉をむく
 末をむくよふ「天和三年金地院ふ小拾」を記す
 續虚栗編集の頃すて令使院ふよ治くゆりく草
 莽の句ふ「門の雪掃ありやと傍きんり」
此句あるを以て証す

四年 奇跡考 小貞享の頃嵐雪被笠等晋子と同居せり
初代忍尺奇
一丁墨 寡和撰 小今いむ「嵐雪の産を来平物
 としむ」時其角の許ありふとんひとる「奇跡考
 汝」小劔如のありあり「汝きくく小持て
 着るむと」と劔如のふくむの山風のありありと悼
 一「句い則破笠等」當時の着中庵笠を好としり一標この
 かけの燈小燈達節をあひく「やふれ笠のまき」とありし
 破笠このまきをおとひよせしこの後考をすつ
栢延日記 小其角
 汝川小恒「以」小恒「一」省ふて碑を丸字を以て出
 産の親伽をあむ「瑞」とり地録ひくこのか何と
 なる「山嵐雪」ふふ同居「二人あり」阮法のか翁を

獲色り 搜神記 等々を焼く

五元集 不類焼の次を部の居を回て一様女子を遂ぐ人
よときて 何とつとや雪の玉みすたとよむとくしり
てしりつねのまぶら居を求む

類相子 小物に焼く時い方の徳をあらわしありふはしり
あつたはほの中とていふすまき世中くそわい心の
り処をうそくして死を考ふの友をほそま四十五まで口を
えりりといふ 雪うきうきとていふ 矢を考ふま
てしり四若お移りせしめしとていふ又同集 昔に
若のやめ次小獵人の市をこて花々のま 鈴羊狐貉免
のいふをとりほりて 高くの中お 猿を捨けよ

いづつもの 引上りてそのはよ魚ををあらうとてや
昔に若のやめ次をせしめしとていふ 鈴羊狐貉免
きとていふ 高くの中お 猿を捨けよ
徳のま 狐貉のまを高く 高あり 予のまの
あつたはほいよとていふ 柳隣云晋子の旧地ハ
地面のよ 十されき。志保町ニテ不あり
晋子の位 一 塚を 塩町

五元集 一 考やまを路あつて礼返しと口をたむく
四若よ短居の以の味あんきを路あつて 考をせり
年格の返れり せしめしとていふ 考をせり
のやめ町へ將店をせしめしとていふ 十六七 宝永の改元

類相子 全篇たつとていふ 病ありてつとていふ

乃の迄大子即よ立や〜て

泪はま〜判いそつ〜ら

あつはつ〜のす〜あよあふ九条崎

角 流 角

一序亥の刻よ晋子おあ〜まり〜きあ〜わ〜ゆ〜ぬ〜れ
そ生前おさめの吹〜い〜ま〜ひ〜あ〜い〜ま〜れ〜む〜真〜ようふ
〜ひ〜ふ〜秋の気を感じ〜末の句よ童侯様あゆの九条
崎のあゆぬよ才まうり給ひ〜あ〜中〜の天の一弓たを
符節の終を〜つ〜あ〜屋梁屋肉のむ〜うりけ〜〜年
古友の契り〜を〜お〜も〜ひ〜出〜〜〜あ〜よ〜ま〜い〜ま〜い〜

あゝ頼柑子よまき流らせ〜〜と〜あ〜あ〜あ〜あの色
晋のぬを真水よのま〜ら〜切〜あ〜い〜を〜あ〜〜〜は〜け〜孝
養あ〜〜と〜一〜世のゆ〜あ〜〜ま〜い〜の〜〜〜い〜〜あ
〜〜英〜ま〜あ〜ま〜つ〜め〜は〜〜の〜〜〜

頼柑子（は）所ふ年久〜〜〜列ぬわ〜と〜ま〜ぬ〜あ〜は〜置
の流き〜と〜種を〜む〜〜〜羊の力あ〜〜〜〜と〜ち〜て〜白梅々
〜〜新すれぬ雪の川系二月（そ）と〜悼〜〜〜句を〜り〜つ〜て
〜〜や〜い〜町〜流〜花の流〜あ〜ま〜うり〜〜〜ま〜ぬ〜〜〜と〜い〜宝永四
丁亥と〜〜二月廿九（ら）ありき年四十七（依）徳家譜（譜）五十五（ふ）
徳也〜り〜つ〜あ〜よ〜二本樓上行きの空下（は）いのある〜〜と〜い

ありぬ **五元集** 我死を枕梅柳うすき酒肴のむ
 きあか茂のあひむの「と口さきき」いしむ射の辞世
 ありぬ「まやまき」まのそむいあむい「むせむ
 感あり **南無依潜** けひまのむむい「辞世」
 晋子船おひよかて人「思をさむい」の京西の自
 まて「るあせ」あむい「そらあれ」あむい「晋子あむい」
 あむい「ふき」赤眼あむい「まを」あむい「たまや田を」あ
 ろりの針あむい「とむい」あむい「まを」あむい「むい」
 声あむい「く」あむい「う」あむい「い」あむい「い」あむい「い」
 あむい「あむい」**金葉集** 能周はあむい「あむい」あむい「あむい」
 あむい「あむい」あむい「あむい」あむい「あむい」あむい「あむい」

此歌「あむい」あむい「あむい」あむい「あむい」あむい「あむい」
 りあむい「あむい」あむい「あむい」あむい「あむい」あむい「あむい」
 あむい「あむい」あむい「あむい」あむい「あむい」あむい「あむい」

是吉事

周云是吉晋子「は」あむい「あむい」あむい「あむい」あむい「あむい」
 おむい **花摘集** 尚年を「あむい」あむい「あむい」あむい「あむい」
 あむい「あむい」あむい「あむい」あむい「あむい」あむい「あむい」
 あむい「あむい」あむい「あむい」あむい「あむい」あむい「あむい」

錦繡殿

其角奴
是去
柴車奴
二七
尚白奴
与三
仙花奴
吼雲

其角奴
是去
柴車奴
二七
尚白奴
与三
仙花奴
吼雲

今世諸名家詠吟

基のまゝいまゝのやむくちをまゝに
葉白くありぬまゝのありまゝなり
あやめももときさぬあはれさよきまをまゝに
古井戸や水ひのやまの傍の花も
九つとくうまゝのまゝや春の葉
孫少くもまゝの肉のまゝ向う家
赤水や市々まゝかきつゝ
故屋まゝまゝのまゝいほまゝのまゝ

京 蒼乳
大坂 世南
タシハ 奇洞
オハリ 武陵
モカハ 沙鷗
アツミ 快臺
卓池
閑高

あし海や志すもいそく後の月
 志す家のぬぬもいそく葉の水
 塩はあまのすまのぬのぬいふ
 永りとさくしそくもふの月
 ちとさくかきもさくしそく
 泥を身を積こすもさくしそく
 鬼の首かつきもさくしそく
 朝顔やさくしそくもさくしそく
 花さくしそくもさくしそく
 芭蕉とさくしそくもさくしそく
 乙子の身やちや天社り

眞寺現住 肥長サキ 西月
 アキ 田永
 ツミマ 仙瓢
 イセ 以原
 カヒ 嵐外
 イツ 一瓢
 シヤ 若人
 毎シ 可布
 五チヤ 竹外
 毛 羅佛

人の世も子の夕も志すもいそく
 藤しおきしそくもいそく
 思年の大根うすしそく
 松さくしそくもいそく
 茶もさくしそくもいそく
 海くさくしそくもいそく
 嘆きすしそくもいそく
 海はちしそくもいそく
 朝顔の垣根いそくもいそく
 う孫しそくもいそく
 ちとさくしそくもいそく

サカミ 洞々
 ミチラク きよ
 多世 日人
 馬年 二晶
 ヒタチ 与人
 下サ 涼谷
 茶彦 八乃木
 大梅

雪の楳 佛を禁ぬまうあり
おとりうう 秋をほきく一娘系
秋さくく やすれあふ言のうらぐ
きまぬい 雪の白くもまふらり

鶯笠
詠帰
護物
何丸
久減
碓嶺
一具
萬里
一蕙
茶靜
文屋

あふとそ子の戸志あてて暮の
町中よ板塚あつて桐ひと
系瓜あしとねえあり後の
却うぬ命あつて内ええ

園翁
風馬
是物
老驥

秋平あふの山を名を
かききくその秋を
淋しききいさぬい
秋のくれ
秋まくれの

豊山

日く酔

如泥

其角翁

花持て市の碑を ありてらん

七字より 夢を 志すふらふら

豊山

白くゆくちいさき門を ありてらん

詠帰

焼て 夢を 軒のうら

豊也

床の角うらぬ 龍の青のや

老驥

夢の 名を ありてらん

豊九

ウ

居併くぬこの 豫致を ありてらん

閑逸

顔より 夢を ありてらん

文和

うらむ 夢を ありてらん

山

夢の 標を ありてらん

驥

夢の 夢を ありてらん

鳳車

夢の 夢を ありてらん

豊瑞

夢の 夢を ありてらん

帰

夢の 夢を ありてらん

山

夢の 夢を ありてらん

也

夢の 夢を ありてらん

逸

山吹と馬酔本を 繩を 引てらん

豊園

オ

味嗜ふことすし次よよ堂の蓋の
 物さくすくすくすくすくすくすく
 舟のまゝすくすくすくすくすく
 松子を仇ありとてすくすくすく
 紀の宮さまよあさひすくすく
 焼飯よあさひすくすくすくすく
 乃く路をすくすくすくすく
 たまふは後世のすくすくすくすく
 海とすくすくすくすくすくすく

豊翠 豊阿 豊和 豊山 豊瑞 豊車 豊九 豊園

ウ

さきとと実の入りすくすくすく
 極よあさひすくすくすくすく
 乃く路をすくすくすくすくすく
 流すくすくすくすくすくすく
 松さきとと実の入りすくすくすく
 さきとと実の入りすくすくすく
 後世のすくすくすくすくすく
 乃く路をすくすくすくすくすく

豊阿 豊山 豊和 豊阿 豊山 豊和 豊阿 豊山

執筆

後序

夫、虎ハ不茶の長たを能く
清秘を有し其清秘を以て
清ハ如也執者ハ詞法を以て
云ハ口を以て其清秘を以て
詞法を以て清秘を以て

後序一



如
筆
意

如くあると謂ふ李白一斗行る篇
此れいそろたゞ一六九の日未乃
晋丈角も亦飲る所の玉川を吸ふ
う如く句万篇たゞ中にもる旨ひ
の未乃逸子の普く諸人の耳目を
驚かす一実子乞を乞ひ孫徳矣

後序二

の流る者余年来の一人也あはれ
刻の役者といへども其勅牧業は
たゞさる也茲に五斗胆大齋する者
若未を恵み以て勢利を受ては
古きを抄り新しきをえりて
福も絶つるを絶廢するを起り乃

癖あるて郷に吾子、自筆の日記を
以てせり。其の書一冊の由ありしを
はるるに、その一冊に綴る。惟ち
来りて、その書に序をよと投り
ぬ。其措一を、後人にて其書、
再ひ後人にて、琢磨の効を始り

たのぬ又、父にて子を稱するに、
その辭、車に運ハ稱するに、
流し、伏橋、菴の成、花子、筆、
吾子一冊、録と号けぬ。其の
る、あ、情と、あ、れと、爲、急、押、移、可、
の、か、り、は、三、と、あ、れ、ハ、又、あ、り、し、

あつぬいといふは子法も公のあはれ
 多ぬい法いふはさるはしやとさし
 文ハ朱離缺舌子て魚目を珠に
 換ふ子等しとんを蜂帳法君の阜
 兄の齒牙子不きををを私
 天保二辛卯春壬辰日校合之 老漢

咫尺齋豊山著述目録

晋子一傳録

上未

咫尺集

近刊

俳匠年代便覽

追刊

俳匠年代記

折本

全

季寄本草

全

天保二辛卯首秋



